

芥川龍之介と田端文士芸術村

児玉 寛嗣

田端は上野から北に伸びる台地に位置する。そこは上野の東京美術学校（現・東京藝大）に比較的近く、明治の半ばから画家、彫刻家や陶芸家たちが住むようになった。また、汽車の駅や市電の停留所が近いので、二葉亭四迷などの小説家や文筆家も居を構えるようになった。

大正三年、芥川龍之介はそれまで住んでいた本郷の家が大雨の被害にあつたため、彼が「画かき村」と称していた田端に越してきた。駅の西の高台に建てた家を、大変気に入っていたようである。転居当時はまだ東大の学生であつたが、大正五年に発表した「鼻」を文豪・夏目漱石が絶賛したことがきっかけとなり、新進気鋭の作家として文壇に華々しいデビューをした。小説家・芥川龍之介の誕生である。その後「羅生門」、「蜘蛛の糸」、「河童」などの作品を発表していった。高く評価されていた芥川を慕つて大勢の文人が次々と田端に移り住むようになった。芥川の下町人特有の世話好きな性格が多くの人々を惹きつけた。建て替えて書齋を広くして、文学や芸術を論じ合うサロンとして開放して、日頃から多くの客人を招いた。田端に住んでいた室生犀星は「田端は賑やかな詩のみやこ、詩のみやこの王様は芥川龍之介」という言葉を残している。住人の誰からともなく田端を「田端文士芸術村」と呼ぶようになったそうだ。画家、陶芸家、彫刻家、歌人、作家、詩人など分野の違う者が論じ合うことでお互い刺激しあい、創作活動の質を高めていったことだろう。

村は関東大震災では大きな被害に遭わなかったが、昭和二年、芥川が「唯ぼんやりとした不安」という言葉を遺して自死した後、去る者も出てきて村は次第に活気をなくしていった。昭和二十年四月の空襲で村は壊滅的な被害を受けた。今では「田端文士芸術村」を偲ばせるものを見ることは出来ない。芥川の住居跡もモダンな住宅となっている。ただ駅前にある「田端文士村記念館」が村のあつたことを後世に伝えている。